

第十九話

杜若連歌

里村紹巴

へよしある山は入て見まほし

「心」を詠いこみ、動きを準備したのは、生路の長坂弥左衛門守勝でした。その日は、日中はけたたましく雲雀もあがり、汗ばむ程のいい天気でしたが、座の進行とともに日も傾き、全く快いのだかな夕べとなっていました。しかし、ここ水野無仁斎正勢の催す連歌の席は、「句付け」を競い合う張りつめたものとなっていました。

九十五句目を紹巴の高弟心前が詠みます。へ引きかくす……。

執筆を務める満重のしわがれた声が、先を促すように後に続きます。

へ引きかくす……。

背をピンと伸ばし、端座した心前の声が響きます。

へ花やかすみもの……、ねたむらん。

へ春の夕べもしら雲の空

さり気ない宗倫の受けです。

へつらにしもわかる雁のひとりゐて。

透きとおる宗匠里村紹巴の詠みが、終末を迎えての一座の進む方向を示しました。

再び、今度こそはわたしが付けようと期する人々の、声にはならない声と、前の句を詠みかえし、句付けの手がかりを得ようと必死に味わい、口ずさむ息づかいが、いやがうえにも連歌の雰囲気昂めていきました。

へ汀にさびしあし鴨の声

「さびしさ」が取りあげられました。

へ程もなくよせくるなみやたかからむ。

亭主無仁齋正勢の思いきり発句と離れて詠んだところがよかったのでしょう。挙句は執筆の満重がたくみに賦物を詠いこみました。



へたえぬ流れのしるき山もと

「お見事でございます」思わず叫んだ紹巴の  
声の後は、「そもそも、百韻と申しますのは：  
∴。」という型どおりの挨拶があり、後は無礼講  
となりました。

協力して大作を仕上げた満足感と連帯感で  
宴も盛りあがり、人々は盃を重ね、日ごろ堅  
物で通っている人の口からも卑猥な発句が飛  
び出し、武名を駆せる人々も正体を失い酔い  
しれていきました。

お大の方も、接待のために動き回る女たち  
と客人の喧騒を眺めながら、ゆつたりと解放  
感にひたっております。

### 椋原という人

半年近くも、水野信元のもとに逗留して  
いた連歌師の里村紹巴が京都に帰ると言い出し  
たのは、孟蘭盆の二日後の永祿10年7月18日

のことでした。

翌19日、水野氏の人々の止めるのを振り切るように緒川を立ち、一行が坂部城の離れに着いたのはお昼近くでした。紹巴が脚絆を解き汗をぬぐうのを待ちかねるようにして、はるばるついて来た生路の長坂弥左衛門が口を切りました。

「奥方様、どうかお師匠さんを引き留めてください。あれほどここが気に入ったと言われていたのに、急にお帰りになると申されるのでございます。」

長坂弥左衛門守勝の顔には、明らかないらだちの色が表われておりました。

ゆつくりと茶をすすり、紹巴はお大の方をおさえるように話し始めました。

「今川様には、三つのお宝がございました。蹴まりと能と連歌でございます。百姓出の私には、蹴まりのことはわかりませんが、能と連歌は本物でございます。特に連歌は、近

衛中将義教様以来のもので、ここにこうして

ご厄介になったのも、もとは私めが、宗長様のお跡を尋ねようと思ひ立つたためでございます。」

聞く者に有無を言わせない強さをもって、紹巴のことばが続きます。

「ご簾中さま、どなたがここにみえるのでございませうか。能楽師の岡戸様もそうですが、連歌の方にも、今川様ゆかりの由緒あるお方がおみえのほすでございます……。」

「ほんの田舎者の連歌じただてでございますのに、そのように申されますとはずかしゅうございませう。それより、何がお気に障ったか存じませんが、このお大も、いま暫くのご滞在をお願いいたします。」

永い沈黙のあと、ハラハラと涙を流しながら、興福寺からの使いがあり、帰らなくてはならなくなったわけを告白し、右足を引かず

るようにして歩く椋原氏に案内され坂部を去って行った里村紹巴の努力のいかにもなく、東大寺が松永勢に攻められ大仏様が焼け落ちたことをお大が知ったのは、この年の秋10月末のことでした。

## 連歌



— 洞雲院山門 —

連歌は室町時代から元禄時代にかけて中央・地方の有力者や文化人に幅広く行われたが、その後、むつかしい作法や約束ごとがあるため、

次第にたしなむ人が少なくなつた。

坂部洞雲院は久松氏の菩提寺で、歴代の墓所があり、お大の方の遺品、回りの地頭などを感し、お大の方の始めたと伝えるオセンボウで有名な古刹であるが、ここに秘蔵される杜若連歌は、里村紹巴自筆の文学史上貴重なもので、当町文化調査報告第一集「阿久比の連歌」(昭50)で、白沢八幡社蔵「北原天神法楽連歌」と共に紹介されている。

## 第二十話

### 柳審城の落城

時は天文12(一五四三)年7月の初め、新海淳尚の拠る宮津の柳審城内では、複雑な沈黙に包まれておりました。

「殿っ、また軍使でござるぞ」

城から見渡すと、なだらかな丘や谷は、寄せ手の水野軍の旗差物で埋まっております、城内からは蟻一匹はい出すすき間がありそうにも思えません。ちょうどその時、南東の田の間から曲がりくねって伸びてくる道を、白旗を高く掲げた武者が一騎、ゆつたりと登ってくるのが見えました。

城は水野軍に取り巻かれて、すでに二日を経ております。野山をおおう大軍を迎えて、



城兵は無謀に討って出る愚を避け、城門を閉ざして、頑として防いでおりました。

——おもむろに床几に腰を下ろした軍使は、大声で口上を述べ始めます。

「これは、水野右衛門大夫からの使者でございます。さて、使いのおもむきは、これ以上無益な抵抗はなされず、いさぎよく城門を開かれよ。わが殿には、熱田社ゆかりの名門をここに断絶させるに忍びずと申されてござる。この旨、ご料簡あつてしかるべしと存ずる。」さらに少し声を落として、つぶやくように言った。

「坂部城の久松殿は、すでに好しみを結ばれましたるぞ。」

「あつ。」と列座の城兵は息を呑みました。

——別室に軍使を控えさせてから、広間に将兵を集めた淳尚は申しました。

「元寇の役で殊勲を立てられた第十三代淳英様が築かれてよりこのかた、代々のご先祖様

が鋭意経営に心血を注いでこられたこの城も、今はその命運が極まった。久松殿もすでに緒川と通じ、四面楚歌・援軍も期待できぬ……。わしが非力で、手を打てなんだばかりに、そなたたちをここまで追い込ませてしまった。まことに済まぬことじゃ……。」

「殿っ、何を仰せられます。われらも柳審城の武士、たとえかなわぬまでも、城門を開いて決戦をいどみ、全員城を枕に、殿の御後をしたって討死の覚悟でござる。軍使の開城の条件には、この城を取り壊せとござりました。そうな。父祖代々がお仕えし、朝夕仰ぎ見てまいったこの城を破却せよとは、あまりの言い分でござる……。」

「いやいや、そなたたちの忠節、わしは忘却せぬ。しかしながら、わしの身はどうなってもよいが、そなたたちだけは生き延びてもらわねばならぬ。ご先祖様には申し訳なきことながら、城よりもまず人じゃ。ひとまず恥を忍

んで、野に再起の日を待とうではないか。」  
声涙共に下る主君の決意に、城中の将兵はみな泣きました。  
こうして、永い伝統を持つ柳審城は火炎に包まれ、その跡は、むなしく夏草が生い茂るのみとなりました。

### 弱肉強食の世



— 柳 審 城 趾 —

応仁の乱後、天下は麻の如く乱れ、各地に大小の豪族が割拠して争い、強い者が生き残っていくことになった。久松氏は、いち早く水野氏

と同盟を結んで生き残ったが、宮津柳審城に拠った新海氏は、水野軍に一蹴され、城を破壊されることになる。なお、宮津の光西寺には、柳審城古絵図の模写が残されている。

新海氏は、その系図によれば、菅原道真の四男淳茂（英比磨）を遠祖とし、十三世淳英が宮津に築城したと述べているが、系図の史料としての扱いは久松系図で書いたとおりである。

## 第二十一話

# 阿久比門徒の奮戦

天正5（一五七七）年の春のことです。

薄暮を迎え、周りの小松の枝がねずみ色の空に溶けこもうとしているとき、宮津の裏山づたいを、屈強な人々が三々五々東への道をたどって行きました。

人々は、古びてはおりましたが、皆、胴丸で身を固めた上に野良着のらぎをはおり、槍やりや旗竿はたざおに大刀を添えて、蓆むしろで巻き包んだものをしてっかりとかかえ、その総数は四十〜五十人はいらっしゃるか、ひたひたと歩を進めておりました……。

「のう、皆の衆。目指す先は、ひとまず、亀崎かめざきの港でござる。目立たぬよう、おのおの急

がれよ。」

途中に立った僧形の男が、通り過ぎていく群れにささやきかけます。



声をかけられた人々は、黙々と頭を下げて行く者、南無阿弥陀仏なむあみだぶつと低声に念仏する者、「院主いんしゅどの、心得申した。」と応ずる者など、



さまざまでしたが、皆、目をキラキラと輝かせておりました。

宮津光西寺の院主教円に率いられた間行寺（東光寺）・蓮慶寺・光西寺に属する阿久比谷の門徒たちは、いったん亀崎の浄顕寺に集結し、そこから船で、大阪の石山本願寺へ向かおうとしておりました。

織田軍と本願寺門徒衆の戦は、長く激しいものでした。この時より十五年前の永禄5年に三河一円を荒れ狂った一向一揆は、徳川家康の巧みな鎮圧で一年間で終わったのに対し、比叡山焼き打ちを敢行したほどの信長は、一揆を殲滅しようと、長島では女・子供まで殺してしまうという激しさで、信仰に殉じることを本望と考える一向宗徒と真っ向から対立しました。

信仰心の厚い阿久比谷門徒衆の中には、水野軍に破壊されて野に下っていた柳審城の家臣がおり、その人々は、水野の後にいる織田

信長に強い遺恨を持っていましたので、大野の光明寺の呼びかけに応じて、大阪へ出陣を決意したのです。それだけに、石山での奮闘はまことに目ざましいものでありました。

しかし、織田は大軍です。次第に門徒衆の討ち死にや負傷者が増え、その落ち着く先が見え始めていました。

天正8年閏3月のことです。事態を憂慮して、勅使が大阪へ下向してきて、朝廷が仲に入るから今のうちに和を結べと伝えました。

本願寺の門主光佐（顕如）も悩んでいました。再び長島や比叡山の悲しみを繰り返してはならないと。——結局、光佐は、朝廷の仲介を受け入れ、門徒宗を解いて、自身も紀州鷲ノ森に引きこもり、後を次男准如に託します。

しかし、長男の光寿（教如）は、どうしても父に従いません。門徒宗の中にも、数多くの人々が光寿に従いました。もちろん、阿久



比谷の門徒宗もその中におりました。人々は欣求浄土の意気に燃えて決死の戦に臨み、6月21日には感状を受けています。

けれども、劣勢となった本願寺の敗退は覆うべくもありません。結局、その年の7月、光寿も降ります。

阿久比谷の門徒宗の何人が故郷へ無事戻ることができたか、その記録は残っておりません。

### 一向一揆



親鸞しんらんの創始した浄土真宗（一向宗）は、八世蓮如れんにょの代から急激に広がり、他宗派のように豪族と結び、院主を中心とする教団組織として、

強い信仰による結びつきと戦鬪力を持ち、戦国末期には石山本願寺の指令を受け、越前・加賀伊勢長島・三河など各地で、大名に対して一揆を起し、その力は大きなものであった。

## 第二十二話

# 姥ヶ谷

## 悲報

「ご家老つ、一大事でござるっ……。」

髪を振り乱した急使が一騎、息絶えだえに城門を駆け抜けて飛び込んできてから、阿久比谷坂部城は、城兵総立ちの後、深い悲しみと決死の思いに包まれました。

織田信長おだのぶながの家来、佐久間信盛さくまのぶもりのざん言で、石山本願寺攻めに参戦していた城主久松信俊ひさまつのぶとしが、天正5年7月19日、大阪の四天王寺してんのうじで無念の切腹をさせられ、城取りつぶしの佐久間軍がおし寄せてくるというのです。

坂部城には、城代坂部藤十郎さかべとうじゅうろうの指揮で、わ

ずかな手兵が、信俊の長子小金丸、次弟吉安丸と若い奥方を守っているのみでした。折悪しく、いちばん頼りになる三河西郡城主の祖父俊勝は一年半前の水野信元殺害を怒って城を捨て行方知れずになっており、義母お大の方は、岡崎へ出向き、応援を頼めそうもありません。しかも、すでに佐久間の軍は城近くまでひしひしとおし寄せておりました。

老臣坂部藤十郎は、奥方と二人の幼い主君に、さとすように言います。

「多勢に無勢、殿のおられぬこの城の命運はすでに窮まりましてござる。どうか、奥方様・若君様、ひとまずこの城を抜け出され、再起をお考えください。大野領へお逃げできれば、奥方様のご実家佐治様が必ずよきように取り計ってくださいませしょうほかに。」

すると、正面の座に着いていたわずか七歳の小金丸が、幼い肩にいつぱいの気負を見せながら、きつぱりと言いました。

「わたちも坂部のお城の後継ぎだ。お父様に死なれて、ここでわしらが逃げては、阿久比の子は卑怯者よと、いつまでも言われ、お父様の正しさは晴らされまい。たとえ、人は少なくとも、わしらは小さくても、立派に戦って見せるぞ。」

五歳の弟吉安丸も、けなげにこつくりとなずいています。城兵たちの目には感動の涙が光りました。

涙をおしぬぐった老臣坂部藤十郎は、家臣たちの方へ向きなると、強い声を響かせます。

「皆の者。若君のけなげなお覚悟を聞かれたか。この上は、最後の一兵になっても、阿久比のつわものの意地を見せてやろうぞ。」

「おーっ」とこたえる城兵たちの背後には、次第に漆黒の闇がせまっております。城内にたかれたかがり火が、パチパチと勢いよく音を立て、居並ぶ人々の影を大きく浮かび上

がらせていました。

## 紅 炎

小金丸は、しばらくの間、唇をきゅつとみしめておりましたが、奥方に向かって言いました。

「母上さま、わたしたちは立派に戦つて父上のおそばへ行きます。しかし、母上は女だから、早くこのお城から逃れてください。」

城代家老も言葉を添えます。

「奥方様、若君の申されるとおり、女どもを引き連れ、早々に退転ください。奥方様はただ今身重のお体。どうぞ、ひそかにお腹のお子様を産まれ、久松家正統の御血筋だけは絶やさぬようにしてください。それが、亡き殿、雄々しい若君やわれらへの何よりの供養でござる。」

奥方は、どうしてもわが子と共に城でと言

い張りました。でも、幼いとはいえ城の主の命令や老臣・城兵のすすめには、従わなければなりません。……夜の闇に紛れて、奥方はじめ城中の女・子供たちは、裏山づたいに、草木の生い茂る深い谷へ身を隠しました。

「ああつ、お城が燃えているつ。」

翌朝、佐久間軍のいつせい攻撃が始まりました。雲の如き大軍が喚声をあげて襲いかかります。すでに城下の侍屋敷や寺々には火がかけられています。

数少ない城兵も必死に防ぎ戦いましたが、次第に傷つき倒されていきます。そして、奪われた大藪目付の高台から大弓で次々と射かけられた火矢で、城は黒煙を吹き出しました。

「若君つ、若君はいずれにおわす……。」

「おお、爺か、たいそう手傷を負ったな。」

「なんの、これしき。なれど、いよいよ最後でござる。爺がご最期をお見届けいたします

るぞ。なにとぞ、お覚悟を……。」

今はこれまで、共に父上の許へ参ろうぞと  
幼い手で刺しちがえた小金丸・吉安丸、腹に  
大刀を突き立てた老臣の上に、どっと火を吹  
く城の屋根がくずれ落ちていきました。

こうして、由緒のある坂部城は灰燼に帰し、  
この阿久比には、城と名づけられるものは一  
城もなくなってしまうことになります。

さて、奥方と女・子供たちは、夜陰にまぎ  
れて無事に奥方の実家佐治氏の宮山城に落ち  
のびることができました。その隠れしのだ  
谷を、人々は「姥ヶ谷」と呼んでおります。  
また、大野に逃れた奥方は、宮山城で無事玉  
のような男の子を産むことができました。こ  
の久松氏の正統の子は信平と名づけられ、大  
切に育てられました。が、青年になって無常を  
感じ、父や兄たちの菩提を弔うため出家し、  
賢意と号しました。そのため、久松氏の家名  
はお大の方の産んだ子に受け継がれます。

## 乱世の悲劇



### — 坂部城趾 —

第二十話の解説で述べ  
たように、戦国時代は弱  
肉強食の世であった。

天下統一を目前にひか  
えて、織田信長は家臣団  
の再構成を計り、たとえ  
以前に有益な協力者で  
あった者でも、自分の意に  
そわぬ者は次々と肅清の  
矢を向けていった。柳審  
城の新海氏を屈服させた水野信元を、佐久間信  
盛のさん言を利用して、甥の徳川家康の手で殺  
させ、同じく坂部城主久松信俊も大阪四天王寺  
で切腹させ、城を焼亡させている。切腹の理由  
は、本願寺攻撃に手抜きがあったという罪状だ  
が、阿久比谷門徒の参加する石山本願寺攻略に  
手加減があったのかもしれない。しかし、それ  
は口実で、戦国時代終末に向けての犠牲なので  
ある。刈谷・知多東部を領した信盛も、間もな  
く追放されている。なお坂部城は、柳審城や他  
の山城と同じく、ワラや板ぶきの粗末な平屋で、  
天守閣を持つ城は安土城が初めになる。

## 第二十三話

# 金の鶏

鶏は別名を早起き鳥と呼ばれ、朝早くから時を告げて一日の元氣な働きを誘う鳥です。

その卵は、農家の貴重な蛋白質たんぱくで、戦前までは、どの家でも数羽を飼って、その飼育は子供たちの仕事になっていました。ところが戦後は、一般家庭で飼われなくなり、営利專業になりました。当町萩地区では、たいへん盛んでした。

さて、その鶏にかかわる当町の昔話二題をおおくりすることにしましょう。

## 井戸の金鶏

むかしむかし、坂部のお城には立派な床置とこざ

きの金の鶏がありました。聞くところによりますと、この阿久比をお開きになりました英比磨ひまろ様が子孫にお伝えになりましたものだから、城主の久松ひさまつ様が、代々家宝として大切にお守りしてきたもののだそうです。

ところが、天正てんしょうのころ、刈谷城主かりや久間さくま信盛のぶのざん言を信じた織田おだ信長のぶながは、野山をおおような大軍をさし向けて坂部城を攻めさせましたので、城はたちまち火に包まれ、落城してしまいました。

その時、この大切な家宝の金の鶏は絶対敵の手に渡してはならないと、城主家老はこれを城の東にあつた深い井戸に投げ入れてしまいました。

城は焼け落ちてあとかたもなくなっていました。月一日の午前一時になると、城跡から、暁を告げる鶏の声が聞こえるようになりました。

さて、皆さんは、今年の正月その金の鶏の

鳴き声をお聞きになりましたでしょうか。

## お山の金鶏



板山の安楽寺あんらくじの裏山を観音山かんのんやまと言います。

このお山には、

朝日の当たる一本すすきのもとに金の鶏が埋めてある。

という伝説が残っています。

いつの時代でも、どこでも、そういう伝説があると、掘り出してみようという人が出るものです。坂部城もそうでしたが、昔、この観音山のあちこちを掘って回った人がありました。

でも、どうしても金の鶏は出てこず、そのかわりに、たくさんの小さな五輪塔が掘り出されたそうです。

このことから考えますと、このお山の近くには、奈良時代から鎌倉時代にかけての大昔に、都の優れた文化を持つ有力な豪族が住み、お山には、金色に輝くみ仏を祀った大きなお寺が建てられていたのではないのでしょうか。この金の鶏の伝説は、観音山が仏のお山として大切に敬われてきたことを表しているのかもしれないですね。

## 第二十四話

# かわずの面

## ひび割れ

「庄屋さま、どうしても、わしらのお願い、聴いてはもらえませぬか……。」

「のう、皆の衆よ。この度の大変な日照りに、なんとしても雨がほしい必死の願い、わしもよう分かる。」

わしとしても、お伺いやらご祈祷やら、あらゆる手だてを尽くし、皆の衆にも、いろいろと合力を頼んできたが、いまだに、その効きめが現れてこぬ。この上は、残された道は、あの鎮守様の神面だけが、だがのう、これだけは、わしはどうしても気が進まないの

じゃよ……。」

明和5年7月、阿久比谷には一月の間、一粒の雨も降りません。次第に川は涸れ、ため



池も干上がり、そして、田は亀の甲羅のよう  
なひび割れを見せ始めておりました。

すでに、稲の葉先は白くよじれ、村人が自



分の家の井戸から桶をかついで柄杓で一株ずつ水を与えていく姿が各所で見られたのですが、その井戸も底を見せ、今では飲み水にも事欠くありさまとなりました。

いずれ、つけ木を持っていったら、たちまち一面に燃え上がってしまう日も近いように見えました。

——福住村の庄屋左衛門は、屋敷に詰めかけた村人たちを見回しながら、額にじむ汗を拭い、また語りかけるのでした。

「去年は大変な大雨で堤防が切れ、ひどい痛手を受けたというのに、皮肉なもので、今年は一粒の雨もいただけぬ。世の中というものは、まことにままならぬものじゃ……。」

「さて、皆の衆。うすうすは知ってお思うが、あの『雨乞いの面』は、わしの先祖が不思議な縁で手に入れた、まことに靈驗あらたかなお宝なのじゃ……。」

## 翁の面

「わが家の六代前に当たる岡戸祢宜左衛門様と申すお方は、三州は中窪の出で、武術ばかりでなく、芸能にも堪能で、殊に能楽では世に聞こえたお方であった……。」

——それで、仕官した駿河の太守今川義元公に大変気に入れられ、お側衆として重く用いられていました。

ある時、殿の代理として、海路、三島明神へお参りしてくるよう命じられました。

舟に揺られて、東へ海岸沿いに行くうち、祢宜左衛門さんは、ふと何か舟べりへ漂い流れてくる物を見つけ、つと手を伸ばして拾い上げてみると、それは小さな「翁の面」でした。なぞのようなほほえみを漂わせたそのお面は、彼が今まで手にしたいくつかの名工の面のどれもが及ばぬ逸品でした。

「これは、おそらく、竜宮城からの賜り物に

「違う。」

思わずおしいたいで、感涙にむせびました。

彼は、この「翁の面」を大切な家宝として  
永く子孫に伝えたいと考え、他人には漏らさ  
ず、家の奥深く秘蔵することにしました。

ところが、永禄3年の夏、今川義元は織田  
信長の奇襲にあつて桶狭間の露と消えてし  
まったため、祢宜左衛門さんは浪々の身とな  
りました。草木村正盛院のご開山快翁禪師  
様が桶狭間の戦死者の弔いに来られたのがご  
縁で、祢宜左衛門さんは福住村へ「翁の面」  
を捧げ持つてこられ、同僚の近崎さんは草木  
へ移り住むことになりました。それで岡戸の  
家では、祢宜左衛門さんを初代様と敬つて申  
し上げることになりました。――

「先にもお話したように、初代様はこのお面  
を子々孫々わが家の宝となさるおつもりでお  
られたようだったが、その死後、二代目様は、  
物が物だけに、粗相があつては申しわけがな

いと、先代様の三回忌に、その面を持参して  
お寺へ参られ、どうかお預かりくだされとお  
願ひもうされた……。」

――当時、福住村の興昌寺の住職は隣堂様  
と申され、寺の中興と仰がれたお方でしたが、  
お面の由来を聞かれて、それでは鎮守の神宝  
としてお敬い申すのがよからうと教えられた。  
村人も、神面は竜宮城からいただいたものゆ  
え、お社の宝として祀られれば、日照りのと  
きに雨を恵んでくださるに違ひないと喜び合  
いました。――

「わしも、皆の衆の難儀を見かねて、実は、  
先日こつそりとお寺へご相談に上がつてみた  
のじゃが……。」

――庄屋左衛門の来訪を受けた興昌寺の  
当時の住職円戒さんは、しばらくの間黙つて  
いましたが、しわがれた低い声で、実は寺伝  
に「みだりに神面を用いれば、かえつて大い  
なる災いを受けん」とあり、自分はまだ修行



中の身、未熟な取り扱いで神威に逆らい、戒めのとおりになつたら申しわけないからと言うのです。――

「わしものう、円戒さんにそうまで言われては、これといったよい思案も浮かばず、しおしおと帰ってくるより仕方がなかつた……。」

### 篠 っ く 雨

しかし、興昌寺の円戒さんは、村人たちの必死の頼みに負けました。

――興昌寺の前の大川端おかわばたには、村人たちの手で白木の祭壇と棧敷さじきが造られ、周囲にしめ縄が張りめぐらされました。――

村人たちがかたずを飲んで見守る中で、円戒さんが大般若経だいはんげきやうの転読を始めました。

ギラギラと照りつける太陽の下で、一心に印を結び、金剛鈴こんごうれいを打ち振り、声をふりしぼつて経を讀誦じくじゆしては、円戒さんは正面の短い柱に掛けられた神面に水を注いでゆきます。円

戒さんが必死なら村人たちも必死でした。

一日、二日、三日、……。

次第にやせおとろえていく円戒和尚。あせりに似た表情に揺れ動く村人たち……。

——そして、七日目の昼すぎ、その日は特に今までにない、どんよりとした蒸し暑さでしたが、突然、川底から蛙の鳴き声が聞こえてきたのです。

村人たちは一瞬、空耳だったかといぶかしげに顔を見合わせました。——。

その時です。突然、南の方の丘陵の上に、ムクムクと黒雲が湧き上がり、それがたちまち三方へのし上がるように広がってくると、ポツリ、ポツリと、白く輝く尾を長く引いた大きな雨粒が落ち出します。

「あつ」と、村人たちが目をすえたときには、白い砂塵をはね上げつつ、どつと銀色の雨の幕が襲ってきて、円戒の打ち振る鈴の音がかき消されてしまいました。

「ワァーッ……。」

人々は、悲鳴に似た叫び声をあげながら、互いに抱き合い、手を振り上げて走り回り、よ



うやくねずみ色の水を流し始めた川の中に身を投じて、両手にすくい上げたり、中には水底をころげ回ったりする者もありました。

しかし、庄屋の左衛門さんだけは、やせおとろえた円戒さんが、よろめきながら一人とぼとぼと歩み去って行くのを、黙っていつまでも見送っていました。

今年の夏にひどい日照りがあったことも、興昌寺の円戒さんが寺から姿を消してしまっただことも忘れられて、福住の里の田には、一面に黄金色の穂が重い頭を垂れていました。

ところが、大変な事が起こり始めたのです。——不思議な熱病で村人がバタバタと倒れます。薬もまじないも効き目がなく、病人は次々と増えていくばかりです。——人々は今さらのように神面のたたりを思い知りました。「円戒様に申しわけのないことをお願いしてほしいもうた……。」

村人たちは、おそろおそろの村の鎮守県神社にお納めしてある神面にお詫びをし、椋原村平泉寺の法印さんを頼んで、ていねいに祈禱

をしてもらいました。

そして、その神宝を模した翁の面を興昌寺に祀ることにしましたが、この面は、いつのころからか、「かわずの面」と呼ばれるようになったといえます。

## 日照り



— 県 神 社 —

知多半島はなだらかな丘陵地で、平地や大川に恵まれないため、谷頭のため池に頼る無理な稲作を余儀なくされた。したがって日照りが続

けば、農民の死活につながるため、水争いが絶えないことになる。愛知用水ができるまでは、神仏に祈るより仕方がないわけだが、元来、雨乞い神事は帝王のもので、各地の伝説には、一般庶民の主宰する神事には利益と共にとたりがあるとするものが多い。この説話は、由来書より八十年ほど前の事に設定した。



— かわずの面 —